

統語的複合動詞 V2 はどこまで教えられるか？ — 意味の「見える/見えない」とトークン頻度に基づく分類 —

Is Syntactic Complex Verb V2 Generalizable as a Grammar Rule?: Classification Based on Semantic Transparency and Token Frequency

藤原美保, ウィラメット大学
Miho Fujiwara, Willamette University

1. はじめに

1.1 研究背景

本研究は、日本語教育における「統語的複合動詞の後項動詞 (V2) の指導」を、意味の類推可能性 (透明度) の観点から再検討するものである。「V1+V2」型の複合動詞は日本語学習者にとって習得が困難な領域の一つとされるが、理論言語学において影山 (1993, 2013, 2021) はこれを、高い生産性と規則性を持つ「統語的複合動詞」と、結合制限が強く意味が慣用化した「語彙的複合動詞」に大別した。

先行研究 (松田 2004) によれば、学習者は未知の複合動詞に出会った際、「V1+V2 の意味加算」で意味を推測する傾向がある。V2 が本動詞の意味 (アスペクトの意味) を保持している統語的複合動詞 (例: 「飲み始める」) は、語彙的複合動詞 (例: 「飲み歩く」) よりも意味の透明性が高く、理解が容易であるとされる (谷内・小森 2009)。

実際に教育現場や教科書では、「～始める」や「～終わる」のような本動詞の意味がそのまま保たれ、意味の漂白化 (Semantic Bleaching) が起きていない代表的な統語的 V2 を、文法項目として導入している。しかし、その他の統語的 V2 の多くは体系的に扱われておらず、学習者の偶発学習 (Incidental Learning) に委ねられているのが現状である。もし統語的 V2 が理論上高い生産性と規則性を持つのであれば、「なぜすべての統語的 V2 を一括の文法ルールとして教えない (教えられない) のだろうか」という疑問が生じる。

1.2 先行研究と問題点 (リサーチギャップ)

この背景には、同じ「統語的 V2」と分類されるものであっても、V2 の意味が本動詞から乖離する場合があるという問題が存在する。例えば「～出す」において、統語的 V2 としてアスペクトの意味 (開始: 飲み出す) を表す一方で、語彙的複合動詞では本来の物理的意味 (運び出す) で使われたり、意味が漂白化して補助動詞化 (作り出す) したりする。このように語彙的複合動詞への重複や多義化が著しい場合、当該 V2 を単一の文法ルールとして一括指導することや学習者による未知の語彙的複合動詞の意味推測 (類推) は困難となる。影山 (2021) は「～始める」「～終わる」から「～あぐねる」「～だす」に至る全 29 語を統語的 V2 として挙げているが、これら 29 語の統語的 V2 全体を対象に、語彙的複合

動詞との重複や類推可能性を網羅的に検証し、どこまでを一括の文法ルールとして指導できるかを選別・分類した先行研究は見当たらない。

1.3 研究目的

そこで本研究では、国立国語研究所『複合動詞レキシコン』および陳（2017）のトークン頻度（指導優先度の補助指標）を考慮し、影山（2021）の挙げる 29 の統語的複合動詞 V2 を分析する。本研究の目的は、意味の類推可能性を主軸として統語的 V2 の性質を明らかにすることで、「一括の文法ルール（規則）として指導できる V2」と「一律に扱えず個別指導を要する V2」の境界線を明確化し、日本語教育における効率的な統語的複合動詞指導に寄与することである。

1.4 研究の意義

本研究の独自性は、言語学的な文法化（語彙的 V2 から意味の漂白化を経て統語的 V2 へ至る方向性）の知見を前提としながらも、あえて「学習者が複合動詞を学ぶ際はまずルールとして統語的 V2（のアスペクト的意味）を学ぶ」という教育実践・学習者の認知プロセスを軸に据え、既習の統語的 V2 から、同じ V2 を含む未知の語彙的複合動詞への意味推測（類推）が可能か（＝意味が見える／見えない）という認知視点に基づき、一括指導の可否を検証する点にある。

言語学理論における分類をそのまま教育現場に適用するのではなく、この認知視点に基づき類推可能な V2 は文法規則として整理し、類推困難な V2 は多義的な個別アイテムとして扱うという段階的方針を示すことで、教員が現場で直ちに活用できる指導指針を提示する点に本研究の実践的意義がある。

1.5 本論文の構成

本稿の構成は以下の通りである。第 2 章では、本研究の基礎となる理論的枠組みとして「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の定量的・定性的特徴を整理する。第 3 章では、本研究で用いたデータ（『複合動詞レキシコン』およびコーパス頻度データ）と、統語的 V2 を三類型に分類するための評価軸について述べる。第 4 章では、29 語の分析結果と指導優先度マトリックスを提示し考察を行う。第 5 章では、教育現場への提言と結論、および今後の課題をまとめる。

2. 理論的枠組み：統語的 vs. 語彙的複合動詞

日本語の「V1+V2」型複合動詞について、影山（1993, 2013, 2021）は生成文法・語形成論の観点から「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」という 2 つの異なる構造階層に大別した。両者の主要な文法特質の違いは表 1 のようにまとめられる。

表 1 統語的複合動詞と語彙的複合動詞の対比 (影山 1993, 2013, 2021)

評価項目	統語的複合動詞	語彙的複合動詞
結合制限 (生産性)	高い (多くの V1 と自由に結合可能)	制限あり (特定の語彙のみ限定)
受け身・使役への接続	可能 (例: 飲まれ始める、飲ませ始める)	不可 (例: X 飲まれ歩く)
V2 の文法機能	主動詞 (V1) にアスペクトや意味を添える	V1 と V2 が一体化し独自の意味を形成
辞書搭載性	原則として個別の辞書登載は不要 (ルール生成)	1 つの独立語として辞書に登載される

統語的複合動詞は、文法の統語ルール (マス形接続) によって統語形成されるため、高い生産性と文法規則性を持つ。例えば「～始める」は「読み始める」「出始める」「呆れ始める」のように、語彙的制限なく多様な動詞に自由に接続できる。さらに、V1 を「飲まれ」「飲ませ」のように受身形や使役形に変化させた状態でも接続が可能である。統語的複合動詞において、V2 は事象の開始や継続といったアスペクト的・文法的な意味を添える役割を担う。

一方、語彙的複合動詞は、語彙部門 (Lexicon) で形成される一語であり、構成要素間に強い結合制限が存在する。例えば「飲み歩く」「出歩く」は成立するが、「×呆れ歩く」のような結合は不成立となる。また「×飲まれ歩く」のように V1 の文法操作を許容せず、V1 と V2 の意味が統合・慣用化して独立した単語として辞書に登載される。

言語学的には、統語的 V2 には本来のアスペクト動詞の V2 と、単独の本動詞の具体的な意味が多義化・漂白化 (文法化) を起こすことでアスペクト的意味を担うものがある (影山 2021)。日本語教育の現場においては、前者のような本来のアスペクト動詞の V2 が先行して導入される傾向がある一方で、後者のような多義化・漂白化を経た V2 も文法項目としてアスペクト的意味で提示されることもある。しかし、学習者が後者の既習の統語的 V2 (アスペクト的意味) を保持したまま実際の語彙的複合動詞に出会った際、V2 本来の動作的意味や多義的な拡張意味 (漂白化の途上・派生による意味) と直面することになる。したがって、言語学的な成立プロセスとは逆方向である「既習の統語的 V2 から、同じ V2 を含む語彙的複合動詞の意味が類推できるか (=意味が見える／見えないうい)」という学習者の認知視点に基づき、一括指導の可否を検証することが重要となる。

3. 研究手法・判断基準

3.1 分析対象と使用データ

本研究では、影山 (2021) が統語的複合動詞として挙げる以下の 29 の後項動詞 (V2) を分析対象とする。

- **統語的複合動詞の後項動詞（V2）（全 29 語/影山 2021）**：～だす、～始める、～続ける、～まくる、～終わる、～かける、～かかる、～尽くす、～きる、～とおす、～ぬく、～そこなう、～そこねる、～そんじる、～そびれる、～かねる、～忘れる、～残す、～誤る、～遅れる、～あぐねる、～すぎる、～なおす、～つける、～慣れる、～飽きる、～合う、～える/うる

評価にあたっては、以下の 2 つのデータベース・指標を活用した。

- **国立国語研究所『複合動詞レキシコン』**：2,700 語以上の語彙的複合動詞データベースから、各 V2 が語彙的複合動詞としても使用されている「重複タイプ数」を収集・計量した。
- **陳（2017）のトークン頻度データ**：『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』に基づき収集された、各 V2 の出現度合いを示すトークン頻度データである。本研究ではこれを、学習者の接触頻度および指導上の導入優先度を測る補助指標として用いた。

3.2 評価軸と判定基準

各 V2 が「一括の文法ルールとして指導可能か否か」を判定するにあたり、本研究では「意味の透明度（類推可能性）」に関する用語を以下のように定義する。

- 「**意味が見える（透明度高）**」：統語的 V2 の意味を知っていれば、同じ V2 を持つ語彙的複合動詞の意味も類推できる状態。
- 「**意味が見えない（透明度低）**」：多義化や漂白化により、単一の統語的 V2 の知見だけでは同じ V2 をもつ語彙的複合動詞の意味が類推できず、多義的な V2 の 1 つの意味としての個別指導が必要な状態。

これらの定義を踏まえ、以下の 3 つの評価軸および判定基準を設定した。

- **基準①：語彙的複合動詞との重複の有無**（V2 が統語的複合動詞としてのみ機能するか、語彙的複合動詞の中にも現れるか）
- **基準②：重複する語彙的複合動詞のタイプ数と意味の透明度**（語彙的複合動詞における V2 が、統語的 V2 と同じアスペクト意味を保っているか、あるいは本来の動作的意味・拡張意味へと漂白化・多義化しているか）。なお、透明度の判定にあたっては、重複タイプにおける統語的意味（アスペクト的意味）の保持率や、他意味への漂白・多義化の度合いを定性・定量の両面から評価した。
- **基準③：コーパスにおけるトークン頻度**（現場での導入優先度を測る補助指標）

これらの基準に基づき、全 29 語の統語的 V2 を以下の三類型に分類した。

1. 分類①：指導可能（OK 群）：語彙的複合動詞との重複が 0 語であり、文法ルールとして例外なく一般化できるもの。
2. 分類②：条件付きで指導可能（OK・例外あり群）：基本ルールとして提示可能だが、少数の語彙的例外が存在するもの（例外を明記して指導）。
3. 分類③：指導困難（NG 群）：語彙的複合動詞への重複が非常に多く、多義化・漂白化が著しいため一括ルール化できないもの（多義的な V2 の 1 つの意味として個別指導）。

4. 分析結果と考察

4.1 統語的 V2 の三分類（全体像）

分析の結果、全 29 語の統語的 V2 は、分類①（OK 群）12 語、分類②（OK・例外あり群）11 語、分類③（NG 群）6 語に分類された。なお、各表における V2 の意味カテゴリは、影山（2021）による分類に準拠して整理したものである。その詳細なデータ一覧を表 2～表 4 に示す。

表 2 分類①：指導可能（OK 群・12 語）の分析データ

V2	意味カテゴリ	重複タイプ数	トークン頻度	意味の透明度	指導判定
～始める	事象の開始	0 語	18,077	高（透明）	① OK
～続ける	事象の継続	0 語	13,415	高（透明）	① OK
～かねる	行為の不成立	0 語	3,422	高（透明）	① OK
～終わる	事象の終了	0 語	1,887	高（透明）	① OK
～まくる	事象の継続	0 語	1,805	高（透明）	① OK
～終える	事象の終了	0 語	1,159	高（透明）	① OK
～飽きる	行為の習慣性	0 語	上位 20 位外（低）	高（透明）	① OK

～そこなう	行為の不成立	0 語	上位 20 位 外 (低)	高 (透明)	① OK
～そこねる	行為の不成立	0 語	上位 20 位 外 (低)	高 (透明)	① OK
～そんじる	行為の不成立	0 語	上位 20 位 外 (低)	高 (透明)	① OK
～そびれる	行為の不成立	0 語	上位 20 位 外 (低)	高 (透明)	① OK
～あぐねる	行為の不成立	0 語	上位 20 位 外 (低)	高 (透明)	① OK

表 3 分類②：条件付きで指導可能（OK・例外あり群・11 語）の分析データ

V2	意味カテゴリ	重複タイプ 数	トークン 頻度	意味の 透明度	指導判定
～合う	相互行為	46 語（内 34 語は相 互行為）	21,191	高～中	② OK（例 外あり）
～える・ うる	結論をぼやか す	1 語	13,712	高～中	② OK（例 外あり）
～なおす	行為の再試行	1 語	8,398	高（透 明）	② OK（例 外あり）
～すぎる	事象の過度な 発生	1 語	7,511	高～中	② OK（例 外あり）
～尽くす	事象の完遂	1 語	2,134	高～中	② OK（例 外あり）

～慣れる	行為の習慣性	7 語	1,041	高（透明）	② OK（例外あり）
～忘れる	行為の不成立	2 語	764	高（透明）	② OK（例外あり）
～とおす	事象の完遂	5 語	516	高～中	② OK（例外あり）
～誤る	行為の不成立	2 語	上位 20 位外（低）	高～中	② OK（例外あり）
～遅れる	行為の不成立	3 語	上位 20 位外（低）	高～中	② OK（例外あり）
～残す	行為の不成立	11 語	上位 20 位外（低）	高（透明）	② OK（例外あり）

表 4 分類③：指導困難（NG 群・6 語）の分析データ

V2	意味カテゴリ	重複タイプ数	トークン頻度	意味の透明度	指導判定
～だす	事象の開始	129 語	12,529	中～低	③ NG（ルール化不可）
～きる	事象の完遂	28 語	8,378	中～低	③ NG（ルール化不可）
～かける	事象発生の兆し	41 語	2,614	中～低	③ NG（ルール化不可）
～ぬく	事象の完遂	22 語	1,333	中～低	③ NG（ルール化不可）

～かかる	事象発生の兆し	36 語	868	中～低	③ NG (ルール化不可)
～つける	行為の習慣性	98 語	上位 20 位外 (低)	低	③ NG (ルール化不可)

4.2 分類ごとの考察とルール化困難の理由

分類① (OK 群) の 12 語の V2 は、語彙的複合動詞への重複が 0 語であり、純粹な「文法形」として機能する。例えば「～始める」は「読み始める」「歩き始める」のように V1 の語彙制限がなく自由に通じるため、完全な文法ルールとして提示可能である。

分類② (OK・例外あり群) の 11 語は、語彙的複合動詞への重複が存在するものの、重複数 (タイプ数) が少ないか、あるいはその多くがアスペクトの意味を保持している。例えば「～なおす」は重複が 1 語 (見直す) のみであり、「～すぎる」の重複も 1 語 (通りすぎる) に留まる。また「～合う」のように重複が 46 語存在するものでも、その約 74% (34 語) が相互行為という統語的意味を保っている。このように、全体の重複数が極めて少ないか、あるいは統語的意味の保持率が高いものを分類②として設定した。これらは基本ルールとして提示しつつ、少数の語彙的例外のみを補足指導するアプローチが極めて有効である。

一方、分類③ (NG 群) の 6 語を一括の文法ルールとして指導できない要因は、「語彙的複合動詞における重複タイプの圧倒的な多さ」と「V2 の意味漂白化・拡張」にある。例えば「～出す」は統語的 V2 としてはアスペクトの意味 (開始: 降り出す) を表すが、語彙的複合動詞として 129 語もの重複が存在する。そこでは V2 本来の物理的移動 (取り出す、飛び出す) や、創出・出現 (作り出す、生み出す) など意味拡張が多岐にわたり、単一の「～出す=開始」というルールのみでは実際の複合動詞の意味を網羅・類推できないためである。

4.3 指導優先度マトリックスの構築

透明度 (類推可能性) とコーパスのトークン頻度を組み合わせることで、表 5 に示す指導優先度マトリックスを導出した。

表5 「類推性（透明度）」と「頻度」に基づく指導優先度マトリックス

頻度 / 類推性	① 一括文法ルールで教える V2	② 条件付きで教える V2	③ 教えられない V2（個別意味で指導）
高頻度	【領域 A】最優先ルール ～始める、～続ける、～終わる ～終える、～まくる、～かねる	【領域 A'】高頻度・条件付き ～合う、～える/うる、～なおす ～すぎる、～尽くす、～慣れる ～忘れる、～とおす	【領域 C】高頻度・多義的 V2 ～だす、～きる、～かける ～ぬく、～かかる
低～中頻度	【領域 B】二次的ルール ～飽きる、～そこなう、～そこねる ～そんじる、～そびれる、～あぐねる	【領域 B'】低頻度・条件付き ～誤る、～遅れる、～残す	【領域 D】低頻度・多義的 V2 ～つける

注：各領域内の V2 はコーパスのトークン頻度順に配列している。括弧内の「A, A', B, B', C, D」は第5章の教育提案に対応する識別記号である。

5. 日本語教育への提言と結論

5.1 現場における段階的指導方針

本研究の結果に基づき、日本語教育現場における実践的シラバス構成および指導指針を以下のように提言する。

1. 文法ルールとして体系化して教える方針（分類①・分類②）：領域 A・A'・B・B'の23語は、「動詞の連用形に接続して文法機能を添えるルール」として積極的に導入する。分類②の例外アイテム（例：「見直す」「通りすぎる」等）のみ「個別語彙」として処理する。
2. 多義的 V2 の特定の意味として教える方針（分類③）：領域 C・D の6語は、一括の文法ルールとしては提示せず、「多義的な V2 が持つ特定の意味機能（例：開始の『～だす』、完遂の『～きる』）」として整理する。その際、その特定の意味においては高い生産性を持つことも合わせて指導する。

3. 偶発的学習 (Incidental Learning) への即座な判断基盤：教材等で未知の V2 に遭遇した際、教員は本マトリックスを参照することで、「一括ルールとして一般化して教えるべきか (分類①・②)」、「それとも「その文脈での個別意味として処理すべきか (分類③)」を即座に客観判断できる。

5.2 結論

本研究は、影山 (2021) の挙げる 29 の統語的 V2 を対象に網羅的な検証を行い、「学習者がまずは統語的 V2 を文法ルールとして学ぶ」という教育実践・認知プロセスを軸に据えることで、統語的 V2 の中でも語彙的複合動詞の V2 として重複するものがあり、その語彙数や意味の漂白化・多義化の度合いによって、既習の統語的 V2 から同じ V2 を含む語彙的複合動詞への類推可能性 (意味の見える／見えない) が大きく異なることを明示・分類した。頻度と透明度を交えた本分類モデルは、日本語教育における複合動詞指導をより効率化し、体系的かつ実践的なカリキュラム構築に寄与するものである。

5.3 今後の課題

今後の課題として第一に、統語的複合動詞にとどまらず、数量的に膨大な「語彙的複合動詞」へと分析対象を拡張すること、第二に、語彙的複合動詞における V2 の意味の漂白度や多義性の構造をより精密に定量・定性分析すること、第三に、それらの意味拡張ネットワークと頻度データを踏まえ、学習者が真に習得しやすい「複合動詞 V2 の体系的分類モデル」を確立すること、の 3 点が挙げられる。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 3-46 くろしお出版
影山太郎 (2021) 『点と線の言語学—言語類型から見た日本語の本質』 くろしお出版
国立国語研究所「複合動詞レキシコン」
<https://www2.ninjal.ac.jp/vvlexicon/about.html> (2026 年 8 月 18 日)
陳奕廷 (2017) 基底と精緻化から見た複合語の分類—日本語複合動詞を中心に 『国立国語研究所論集』 13, 25-50 国立国語研究所
陳曦 (2007) 「学習者と母語話者における日本語複合動詞使用状況の比較—コーパスによるアプローチ」 『日本語科学』 22, 79-99 国書刊行会
陳曦 (2011) 「日本語教科書における複合動詞の扱われ方に関する一考察」 『ことばの科学』 24, 119-131 むぎ書房
松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論により意味分析を通じて』 ひつじ書房
谷内美智子・小森和子 (2009) 「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に」 『日本語教育』 142, 113-122 凡人社